

心筋炎

心筋炎とは？

心臓の筋肉（心筋）に炎症が生じ、収縮力低下から心不全や不整脈を起こす病気です。主な原因は、ウイルス感染ですが、アレルギーや膠原病で起こることもあります、数日の経過で短期間に症状が進行する急性型、長期間かけてゆっくり進行する慢性型があり、特に発症初期にショック状態となり致命的な状態になるものを劇症型と呼びます。

どのような症状が起きますか

急性心筋炎では、発熱など通常の感冒のような症状ではじまり、数日の経過で呼吸困難、全身の倦怠感、顔色が悪い、むくみなどの心不全症状、胸痛、動悸などが起こります。腹痛や嘔吐など、消化器症状を伴うことも多く、胃腸炎とまぎらわしい場合もあります。慢性心筋炎では、このような症状がゆっくり進行し、いつから始まったのかははっきりわからない例が多くみられます。

どのように診断しますか

胸部レントゲン写真、心電図検査、血液検査、心エコー検査などを行い、心筋の収縮の低下や炎症の所見、特徴的な心電図異常などがあれば心筋炎を疑います。ウイルスの感染を疑う場合は、ウイルス分離やPCRなどの検査も行います。心臓カテーテル検査、心筋生検が行われる場合もあります。

どのように治療しますか

心不全を軽減させるため、安静、酸素投与、人工呼吸管理、利尿薬、強心薬などの治療が行われます。劇症型心筋炎の場合には、心臓の近くの静脈から血液を抜き、体外の器械で酸素・二酸化炭素のガス交換を行って動脈に返す体外補助循環（膜型人工肺）が使用されます。また、血液製剤の一種である免疫グロブリンのほか、ステロイドや免疫抑制剤を使用することもあります。